
跪いて乞え

しーこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

跪いて乞え

【Nコード】

N1653T

【作者名】

しーこ

【あらすじ】

王道は読むのも見るのも大好きさ。だが実地はご免被る！そんな腐男子が「良いだろう、おれをアンタにやろう。——アンタが、厭きるまでは」と言う台詞を言うに至るまでの、腐男子と総長？さまの始まりの話

（前書き）

残酷、と言う程ではないですが多少の暴力表現があります。

「王道？」とキーワードに入れましたが？が入っている若干ズレた「王道？」です。で、確認とした「これが王道！」等の決まりがある方も読むのはお止めになることをお勧めします。

また、R15指定ですが「SM」と言う単語がR15か否かが判断つかなかったので一応つけています。∴引っかけかきそう、そうではないような。

基本的に際どい描写等は皆無です（笑）

ご注意下さい。

うん。

おれ、どうして此処に居るんだろ…？

現在位置：膝の上。

Q、…うん、誰の？

A、総長サン、の。

そうです、おれは何故か「そーちよーサン」の膝の上。

ついでに言うなら、場所はその「そーちよーサン」達が溜まり場になっているお洒落なバーの、カウンター。

…極々平凡×二乗、みたいなおれが何故そんなところに？と、誰も
が思うだろう。俺も思う。

と、言う訳で。

はい、ちよっと巻き戻ってみよう（おれも戻ってやり直したい。

そして言うんだ、おれよ、選択を間違えるな！嫌と言える日本人に
なれ！って）。

キュルキュルキュル……

今日、おれは、1人フラフラ街に出て。
そこで、ベタ…と言うか、古いイチャモンつけられて（ところで「
いちゃもん」は平仮名なんだろうか、カタカナなんだろうか。知らないからカタカナだと思って使ってるが、意味はなんとなく解かるのが不思議だよね）、またベツタベタな感じに、裏路地に引っぱり込まれ。

『ぼく、駄目だよ？』

『謝罪だけで済むことじゃねえだろ？』

『そうそう、人にぶつかったら土下座、デシヨ？』

（いやいや、人にぶつかったらすみません、だろ。土下座するほど酷いぶつかり方してねえし、土下座しなきゃいけないほどの落ち度なら互いに謝罪大会だろ）

『でも僕たち、優しいからっ』

『そーそー、ヤサシイ、からな？』

『金置いてけばそう酷くはしねえぜ？』

（優しくない。ぜんっぜん、優しくない！ 財布の敵だ、アンタ等
っっ）

『っっー、訳で』

『『さっさと金出せや、オラ！』』

（…なに、今日。懐かしのベタネタ特集でも、誰かおれで組んだわけ…？）

（此処までくると、ベタっっーかあれだ、王道。王道ストーリー疑うよな。と、言う事は、）

ガシツと胸元を掴まれて、至近距離で唾を顔に飛ばしつつベタな人たちは頑張る。

が。

カツン、と足音。

（え。マジで王道…？）

『……あゝあ？』

ぐるうん、と音を付けなくなる勢いで、音の発生音を絡んできた奴らは全員で見る。おれはちろり、と視線だけを流す。

救いの手にならなきゃ、こんな時意味無いしね。

むしろ、この瞬間に逃げ出すが、上策。

（ヒーローものや戦隊もので、なんで長ったらしい台詞話してる間に倒さないのか理解出来ない派、だったりするんだ、おれ）

と、言うわけで。

グイッ

トン、

バキッ

ドサリ。

『確かにぶつかったことは悪いと思いますが、金払わなきゃいけないほどの事ではないと思いますので、これにて失礼しますね』

（さて、王道ネタさようなら。おれが王道になりきれないんだから、どれだけ筋書き出来てても王道にはなりえん！残念だったな！）

『てめっ！？』

『な、なにしゃが…ぐッ？！』

『てめーらこそ、何やってんだ、あゝあ…？』

『あ、』

『ぐふっ』

バキ、ドカツ

え。

あれ。

何故みなさん、そんなところでお休みに…？

……ええーつと？

気が付いたら絡んできた人たちは地面とキッス。

助けられたんだろう、これは。

『…一応、助かりましたので。ありがとうございます？』

これで更に絡まれたら、救いようが無いシナリオだけど。

ありがとう、ごめんなさいは、誰が相手でもその場に相応しく使わなければ、意味が無くなる言葉だと思うから。

ちょこり、と多少控えめだけど、頭を下げつつ、助かったのは事実だからちゃんとお礼は言う。

礼儀知らずの恩知らず、のレッテル貼られるのは簡単だけど、逆は難しいから。

『……ああ、要らぬ世話だったかもだが、一応俺の不手際でもあるしな』

『……はあ』

いや、別に貴方に不手際は無いと思いますが、と思いつつも曖昧な相槌を打って場を誤魔化す。
詳しい「不手際」の内容なんて知りたくないし、とりあえずおれはもう用無しで良いし。

『じゃあ、失礼します、ね？』

（王道。王道…？ あれ、じゃあもしおれの行動すら物語の中に入っていたとしたら、）

いやいやそんな事はアリエナイ。

自分の脳みそが勝手に動いてはじき出した腐った知識をごみ箱に放り投げる動作を頭の中で想像しつつ、身を翻す。

『…待て』

（え。まさかまさかまさか…）

まっさかあ、と思っても。

止められたのだから、歩みを止めるしかなくて。

（流石にこの人はヤバい。おれ程度じゃ、凌げない）

未だ彼の足元でお寝んねしている二人を伸した動きは、並の一般人がやる動作じゃないと分かっているからこそ、本音を言えば止まりたくなかった。

けど、

『…………お前、』

（え。そこで切りますか。切っちゃうんですか。え。ええ。え？）

ドキドキドキ、と胸が激しく動き出す。

これは、まさか。

『…ついて来い』

（…………やっぱり？）

いや、どちらかと言うとまだみつは、選択肢があるはずだ！

1・ついていく（↓この場合、おれがどうなるか？ おれが知りたいわっ）

2・ついて行くのを断る（↓この場合：考えなくても止められる、だろうな。どっちにしる選択肢1に戻る。その後ボコられるかどうかは不明）

3・今すぐ逃げ出す（↓この場合、後で探される可能性がある。探されたら選択肢増加しすぎて先読めない！）

さあ俺、どうするっ！？

イメージはちょっと昔のテレビCM。なんちゃって。

って！

スタスタとおれを待たずに彼は先に歩き出している？！

『え、あ、ちょ…!』

(問答無用パターンだったか…!)

推察が外れてすこしだけ、悔しいが。

問答無用なら致し方ない。ついて行くしかない。この後は、野となれ山となれ、だな。

——そして着いたのは、細い道の建物の角にひっそりとある、分かりにくい地下のお店の入り口。

カツン、カツン、カツン、とおれを助けてくれた？男は先に行く。踏み間違えば、前に行く男に倒れこみそうな階段を慎重に降りる。

さっきの男の身体能力からすれば、受け止められるだろうけど。もしかしたら避けられて、痛い目見るかもだし。先行く人間はクツシヨンじゃーい！なんて、思えませんが！

(落ちる事前提になんて、考えてませんとも！)

カツン、と前に行く姿が止まる。人がすれ違えるかどうか、の道幅なので、彼の後姿が大体を占める視界の中確認できたのは、ほんのちよつと脇から見えた扉。

(…これは、待っててくれてる、のかな？)

なんて、彼の更に前を見たのが悪かった。

ずるっ

「う、えッ！」

足が滑る。ちくしょう、滑り止めくらいやっつけでんだ！ 階段の端に滑り止めが無い階段なんて、階段じゃねえ、ただの段だ！（やばいやばい、まずいますい。マジで前の人クッションにしてしまう！痛い我慢するから、ちょ、どけっ！）

「あぶ…っ？」

ガシッ

「あ…？」

「……………」

「…、ありが、と ざいます？」

あぶねえから退け、と言う前に。

ぷらぁん、と両脇の下に手を入れられて、子供のように抱き上げられていた。

（…焦ってたおれが馬鹿みたいじゃないか）

「……………」

「…………え？」

彼の腕に力が入ったから、降ろしてくれるのか、と待ってみれば。

何故かそのまま体を引き寄せられて。

首につかまるように、誘導されて。

思わず首に腕を回したら、

（いや、あんたが無口キャラだっつーのは分かってたが、流石に嫌だぞ、子供抱っこ！お姫様抱っこは更に嫌だが子供抱っこも嫌だ！）

「……………」

「ちょ、ま、オイっ！」

俺を片腕に抱えたまま、彼はその扉を…

（開けやがった…！）

ギイイイイイ…

魔界の扉のように怪しい音を立てて開いた扉。

その先には…カラフルな頭、痛そうなピアス、俺たち悪役です的な顔をした男達が、目を見開いてこちらを見ていた。

（こ、こわっ！え、なに、もしかして此处、この人のホームじゃなくて殴りこみ先だったりするワケ?!）

なんて、もしかしてな場合を考えてみても話は進まず、けれどおれを抱えていた男の歩みは進んだ。

（えええええ。これKY（空気読めない）。一昔前に流行ったKY!?!いや、AKY（敢えて空気読まない）かッ?!）

怖くなって、無意識に首に回していた腕の力を徐々に強くしている事に、おれは気付いていなかった。

カッンカッン、カッン。

優雅なBGMが、密やかに流れる。ゴクリ、なんて誰かが息を飲む音なんて聞こえないったら聞こえない。

三下の誰かかこわそーな人が「てめー、何のようだ？」なんて言わないところから、どうやら此処はおれを抱き抱えている人のホームで良いらしい。が、やっぱりこの雰囲気は異様だ。なに。なんで、カラー様々、ピアスジャラジャラ、なわるっそーな奴らがそんな[※]MAみたいな目をおっぴろげておれ見んの？！

確認生物

（近くで見たら、白目部分が血走ってそうで怖いわっ！）

地下にこんな空間が！新境地開拓！？なんて普段のおれなら思えるんだらうけど。むしろ、この雰囲気さえなかったら思っただけ！今は、流石に「今後一切、将来すら関係しないだらう場所を見学できてラッキー」なんて思えない。

（流石に、ヤクザ×一般人が好きCP上位でも無理っ）

身長の違いが足の長さの違い。ながーいストロークで、おれを抱き抱えてる人は優雅に、威風堂々と「おれを抱えて」と言う部分を除けば、格好良い感じにカウンターへと少ない歩数で近づく。

（あわわ、）

「あ、あのっ！」

もう良い。むしろこんな気まずいの体験したくない。逃がして下さい！おれはキャッチアンドリリース派！と主張する為に、声をあげる。

ピタリ

ぴたり、とおれを抱えている人の動きが止まる。

それと同時に、更に店内の密やかに息衝いていた空気さえ、ぴたり。

（え。地雷？地雷？？ おれ、地雷踏んだ？）

此処でこの人にこんな口を聞いてはいけないのか。いや、そもそもおれが口聞くな？まあそんな無理だけど！無理矢理連れてきたのこの人ですから！とか、主張しなきゃいけないのか、もしかして

(いやいや、そんな無いだろ。流石に傍若無人過ぎる。そんな攻めは認めない)

「…なんだ」

「(ほ、なんだ、okじゃん)お、降ろして」

「却下」

「っ!？」

(ちょ、え？ 俺様気質？ドS？どっちだ？)

此処で【おれを知っている】やつが居れば、此処でなんとか踏ん張って引き剥がしてくれただろう。

だが、悲しいことに、この時、この瞬間にそんな人材は居なかった。居なかったんだ！

だから、おれが「(うつわあ、ホンモンの俺様とかドSとか初めて見るわw)」とか内心で盛り上がっていて、緩く再び動き出したこの人がカウンターのスツールにおれを抱えたまま腰を降ろすまで、おれは現実より妄想に盛り上がっていた。

そうして、妄想からハタ、と現実世界へ戻れば、男の太ももの上に股おっぴろげて向かい合わせになって座るおれが居る、と。

(…痛い。痛いわ。おれ、滅茶苦茶痛い子…！)

スツール、つまり細い一人用の椅子、っつーことはどんだけおれが嫌がるうにも、おれを抱えてる人に全体重かけるわけで。なんか知らないけど、腰抱えられて、逃げられないようにされてるわけで。

そんな状況の中、おれ等が席に着いてからようやっと動き出したら

しい悪役 不良くん達が密やかに囁く言葉を情報収集の為に耳を澄ませて聞く内容曰く。

「総長が」「なんだ、あいつ」「なんで総長の膝の上…?」「すぐ追い出されるだろ、」「相変わらず総長の考えることはわかんねえ」「あんな平凡、」などなど。

そうか、総長か、この人。

——って、悠長に飲み込めるか、ってーの。

（二次元には萌えられるが、リアルな三次元には萌えらんねえ人間なんだ、おれ）

素直な心境を吐露した所で、さあて、そろそろいい加減、

「そーちよー？なに、その子」

（つてええええ！なんだ、この美形率！）

声がする方を見れば、美形。おれを抱っこちゃんよろしく抱え込んでる人も美形だが、その人に声かけた人もまた美形。

あれか。不良に「ついつい粋がってみました」「キャラと「あゝあゝ？粋がつてんじゃねえよ！」キャラが居るのと同じか！モブっぽいやつもいれば美形なやつもいる、強さと生きやすさを考えて女が求める優劣！遺伝子レベルで流行りもあるけど本命はコレv的な感じでトライアングルが形成されてて頂点付近はやっぱり人間、美形か！（そりゃ、妄想だけなら不より美。だけど現実が違う、とおれは思ってたんだけど）

（二次元で美形求めても、三次元じゃ早々好みの美形求められない不文律、どこ逝った？）

「…^{せき}赤か」

「はよーっす。そーちよー、なんっすか、その抱えてるの」

じーつと声かけてきた美形を見ていたら、何故か抱えている総長サマに頬に手を添えられて、クキツと顔を総長サマの体に向けられる。なんだなんだ。

「俺の、だ」

(……………)

(は?)

きっぱりハッキリ。

此処でどっかの保育園の保母さんが、「良い返事ですなー」とか言うシーンだったら面白いのに、と現実逃避。

見えない見えない。名前も知らない気安い男が、目の前で目を開いて固まってる姿なんて。

知らない知らない。背後で正にこれが「絶句、なんだぜ」とテロップを出したくなるくらいさっきまでザワついていたやつ等が口を噤んだ理由なんて。

知りたくない、おれを抱えている男の思考、なんて。

(…どうでも良いから、早く開放してくれないかね…?)

そろそろ、おれの平凡人生が崩壊しそーなんです、ケド?

(よし、おれの脳みそよ、久々に働け!)

(この場合、おれはどうするべきか、が議題だ!)

(おれA：逃げる!)

(おれB：いやいや、抱えられてるんだから逃げ出す手段なくね?)

(おれC：無理矢理逃げらって手もあるぜ)

(おれD：無理矢理逃げたらまた掴まんねえか?)

(おれ：おれA、それを採用したい…が!)

(おれA B C D：が?)

(おれ：この場合、「王道」で行くなら如何する?)

(おれA：「留まる」)

(おれB：「逃げる」、も定番だな)

(おれC：王道なら「俺の〓所有権」発ドゥー！)

(おれD：「逃げる」も「留まる」もどっちも「王道」だと思いま
っす！)

(おれ：どっちを選ぶかでまた変わるんだよ！)

(おれA：……「逃げる」選択だと、後日人海戦術で捕まる、が
「王道」)

(おれB：「留まる」選択だと、「この後の展開次第」、かな)

(おれC：や、どっちにしる捕まる？)

(おれD：この世は所詮「王道」が溢れてるもんさ)

(おれ：……え。結局おれが決めんの？)

(おれA B C D：お好きにー)

(……おれにおれが相談したって、結局そんな結論か……！orz)
どーにでもなれ、って思えば楽だったのに、と思いながら、仕方
ないのでまた現実に戻る。因みに上を考えたのはコンマ一秒以内の
超短時間おれ相談。おれがおれに相談したって、どうせ良い案が出
ると思っただけだった。思っただけ、無かったんだ。

少し自分の脳みそ残念に思っただけは秘密だ。

「そーちょー こいつ、男、だよ？」

おおおお！

(常識人が意外と居た！まさかツツコミ！？)

我にかえったフレンドリー・美形が口を開く。発言中身が至極真つ
当で安心したぜ (大体こーいう場合は「そう」と流されるのが
「王道」だから)

さあさあ、君はどう答えるのかな？！とおれを抱きしめている男の
顔に視線を動かす。

「分かってる」

「え、マジで？」

「抱きしめてんだ、分かるに決まってるだろ」

「まーいーや。そーちよーがそう言うなら」

「周知しとけ」

「あいあいー」

つて。

(ちよつとまでええええええええええええ!!!!)

（常識人は放置タイプか！「俺に厄介なきやいいわ」か！）

俺の発言に脳みそパーンですよ。どうしろってんだ、本当。

「あ、あのっ！」

取り敢えず、そーちよーサンのシャツの胸元を軽く掴んで言葉と共に自己主張。見ようによっちゃ、視線独り占め。だけどそんな意図は一切ない。むしろお前、そのフレンドリーさんとイチャコラぶっこけや！そっちの方が二次元じゃなくても萌えるから！とか思ったのは心の中の秘密。

「
…
なんだ」

よし、おれを見たな？みーたーな――？

ホラー展開にはなり得ないが、おれを抱えている時点でアウト！と、言う事で。

「歸らせてください、と言つより歸ります今日は助けてくれたりコケそうなところ救つてくれて有難う御座いました、それでは――」

胸元を掴んでいた手を緩め、手をパーにして、トンツと軽やかに後ろに着地。おつしゃ100点満点！矢継ぎ早にしてしまえば何もかもあやふやになるだろ。むしろなれ！な勢いで、サラツと軽く挨拶をして身を翻す。

（チャンスはもう此処だけだ。名前を知られたら、完全アウト！うつひゃあドキドキなサバイバルが今此処から……）

「…逃がす、訳がない」

（始まらなかつた Z E ! o r z）

腕を即行掴まれて、はいタイホ。オマケに後ろから抱え込みのながーい腕の中w

（に、逃がせー！逃がさせろー！！！！）

うごうごと相手が本気にならない程度に抗う、がそんなの猫がじゃれ付いている程度のことで（だって流石にこのそーちょーサンが本気だったらおれやベエもん）、逃げ切れる訳がない。相手が、逃がそうとしてくれない限り。

（因みに全力で弁解するならば、「逃げたくない」訳ではない。心の底から「逃げたい」が、「逃げれない」のがおれ的花丸回答だ！）

「なんでだろうな？」

クツリ、と咽喉の奥でそーちょーサンが背後で笑う。

「お前が、【俺の】だと思っなのは」

完全に片腕だけで抱えられ、自由な手でするりと顎を撫でられる。その手つきはセクシャルで。

「名前も知らねえ、過去も、学校も、好みも、趣味も なんも、知

らねえのに……………」

（名前も過去も好みもオマケで生年月日も、ぶっちゃけ教えたくないが趣味はもつと秘すべきもんだと思います！）

（未知の世界にご招待レベルだぜ、おれの趣味）

アホな事を考えながら、そーちよーサンがおれの耳に落とす言葉に、聞き惚れた。

（顔も姿も声も極上、これで性格ダメじゃなきゃ、美形って駄目なんだろーな）

「お前が、【俺の】だと俺は思う」

なんて口説き文句。

衆人環視、と言う状況すら無視って、二人の世界。

（どんな「王道」。おれは「王道」なんて、求めてはいなかったのに！）

グラつく、おれの…思考。

（「王道」なんて嫌い」と言えれば良かった。が、困った事に、困った事におれは「王道」が嫌いじゃない）

（……………「王道展開」、ね……………）

（なら、）

「ならおれをアンタのもんだと、アンタのものになりたいと、思わせてくれよ」

無遠慮に踏み込んでくる足ならば、撃退を。

おれの事を考えて、それでも踏み込んでくる思慮深さがあるならば、歓迎を。

（征服される、なんて柄じゃーないが、仕方ない。三次元も興味がないけど仕方ない。アンタが、おれを求めている、と言う現実が、

今此処にはある。だつたら、)

「誠意を寄越せ。一般的じゃあない関係におれを関わらせると言うのなら、誠意を」

(巻き込まれて捨てられる、なんてお断りだ。そんな関係を求めているなら、最初から手を出すな。誰がアンタに「良い」と言おうがおれは断る。そんな結果が最初から見えてるなら、おれに関わるな。何が【俺の】だ、そんなの一方的過ぎておれは認めない。束縛を許せるほどアンタを知らない、アンタがおれに感じたんだらう運命もおれはアンタほどには感じてない。「束縛を許せ」と言うのなら、しぶしぶとでもアンタからの「束縛」を認められるだけの材料をおれに寄越せ！)

ふつと拘束が緩まれ、くるりと体が回転させられ、ふわりと抱き上げられ スツールに腰掛けさせられる。

浮いたおれの足。その足元に、しゃがむ男。

(SMの気は、ないんだけどなー)

(この後にくるのは、やっぱり……)

両手で包まれた靴先。

触れる、唇。

(だめだ。駄目だ。嗚呼、やっぱりか……！)

「(マジ現実で見るとは思わなかった、こんな気障おこでベタでアホな真似……！)」「k t k r !

にやけそつになる顔を引き締めて、屈辱だらう真似をした男を見やる。もう、周囲の奴等はどうでも良い。

合わせた視線は甘く。

(今日、偶々出遭っただけなのに、な)

苦笑して、腕を伸ばす。

まるでどこぞの女王のように、腕を伸ばし、手首から先は力を入れず、持ち上げただけで。

意図を悟って、男が立ち上がり、その手を取るまで。

そうして、立ち上がりその手を取った男は更に気障に、その手の甲に口付け、口端だけを上げてキラリとした獣の目で笑うのだ。鮮やかに。

「【俺の】、だな？」

「良いだろう、おれをアンタにやろう。——アンタが、厭きるまでは」

（後書き）

そうして始まる、三次元のなにか。

続かない
↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1653t/>

跪いて乞え

2011年10月9日02時44分発行